

美術の窓(54)

随想 館蔵品の平安・鎌倉絵画

大和文華館館長 吉川 逸 治

美術館として最も大切なことは、優秀な美術品が数多く蒐集せられていることでもあります。現在館蔵品の点数は約二千点に達し、そのうち国宝4件、重要文化財30件を数え、さらにこれらに準じる作品も多数にのぼっております。

これら優秀な作品は、矢代幸雄初代館長が、終戦後の混乱期に、文字通り東奔西走して、市場に集まる名品のなかより選び、蒐めたものが大数を占めます。これらのさまざまな館蔵品の中から、今回は平安・鎌倉時代の絵画の名品を幾点か取上げ、矢代初代館長の思い出と重ねて、思いつくところを述べてみましょう。

まず、国宝『寢覚物語絵巻』は、横浜の富豪、原三溪翁がその洗練された意匠をいたく称えて愛蔵されたところと、翁のもとで美術品鑑賞の実地訓練を受けた初代館長からうかがいましたが、その図柄といい、色の調和といい、工夫を凝らした構想を賞美し、『源氏物語絵巻』とならぶ絵巻物の傑作と言って、館蔵することを誇りとしました。同じく国宝の『一字蓮台法華経普賢勧発品』も、原三溪翁旧蔵にて装飾経の一字一字のしつらいもさることながら、見返絵の高

一字蓮台法華経(見返絵)

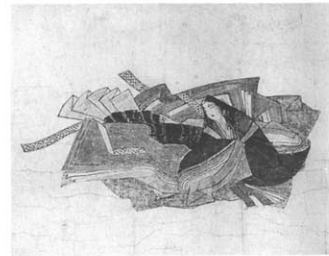


僧に後白河法皇の御姿が写されていると初代館長は考え、この経巻が法皇の勸進によって作られたであろうとしたのです。

ところで、このようなやまと絵を見てみますと、その様式的特徴として特に意識させられるのは、引目鉤鼻の様式です。平安時代に形成された日本絵画のなかには、かような特殊な様式をもつものが、宮廷環境の諸作品のうちに見いだされ、この様式の反映は後世までも強くありました。これは顔の描法から宮廷男女の衣裳の描法まで一定の型に従うのみか、室内は吹抜屋台で、桁・梁を対角線に平行的に通す画面構成を行ない、自然の雲霞・緑山・水流・海波なども、一定の結束的図形にさらに強く定着し、これらを組み合わせる場面を作成しようという一種の幾何学主義の絵画であります。

すなわち、手段を限定、駆使して、和歌のように自分の心を詠じようというので、和歌や歌物語を主題とする画として始まったのか、工芸品として始まったのかどうかは問題でありまじうが、『源氏物語絵巻』はじめ『寢覚物語絵巻』『紫式部日記絵巻』などの挿絵画家たちは、このような絵画思考をもつ

小大君像(部分)



て情緒も行動も空間も暗示させ、作者の意図をくんで場面の心理を描きだそうと努めたのであります。

次に、『佐竹本三十六歌仙絵巻』の二図であった『小大君』についてですが、この作品も原三溪の旧蔵にて、かつて、大正年間に佐竹本が分断されて、歌仙図が一図づつ、くじ引きで臨席した蒐集家の間に頒ち配られた折、人々の羨望した数少ない女流歌人図の一つとして、珍重されたものであります。筆者は藤原信実とされており、御存知のように信実は彼の父、隆信とともに鎌倉時代の初めに似絵の名手として活躍しました。この父子は、時代の英雄の力強い面魂をも描かねばなりません。隆信の作とされる神護寺の源頼朝像は、優美な宮廷画派の伝統のなかに、いかに厳しい規律があったかということ伝えていいます。この肖像画は日本絵画のなかでもユニークな存在でありまじう。頼朝の蒼白な顔貌は、画家が心理の機微まで感じ、分析し、それを一個の生きた魂に作りあげていった顔であります。画家は幾何学形を意識的に強要して、漆黒の袍に包まれた坐像に厳しい祭儀的な趣を授けます。

日本人の自然や人間の奥底に感じる神秘性がここにはあります。西洋の中世末期の肖像画にも、たとえばフーケの『シャルル七世像』とか、ホルバインの『ヘンリー八世像』など、写実と幾何学形を結合した傑作はあります。しかし、このような神祇像のごとき精神の



平治物語絵巻(断簡)



笠置曼荼羅図

凝集された肖像はありません。

鎌倉時代に数多く作られた白描挿絵付物語の例として、原三溪旧蔵の『源氏物語浮舟巻』の冊子本のほか、絵巻物を日本美術の特徴的な例として珍重した初代館長は、『病草紙断簡』や『平治物語断簡』など優れた絵巻断簡をいくつも蒐めて、館蔵品に加えました。

古寺名刹の都奈良にある当館としては、仏教関係よりはむしろ神道関係の画像の蒐集に努め、神道信仰の美的特質を提示したいと男神女神の像をもとめましたが、最も特徴的な神道図像として、深い自然に囲まれた神域に社殿を連ねる宮曼荼羅を蒐め、『春日曼荼羅』、『柿本宮曼荼羅』、『日吉曼荼羅』と神道絵画の優れた作品が館蔵されてあります。この様な宮曼荼羅の画像が日本の仏教関係の礼拝画像に反映して、もう一つ館蔵の『笠置曼荼羅』とよばれている笠置の弥勒大像を主題とした画像があります。弥勒の巨像を線刻した大懸崖の麓に燈籠をたて、色鮮やかな花々を捧げ、傍に十三層の高塔を配し、前方に長い回廊を巡らし、奥に仏殿を置き、小さく人々、僧侶たちが表されています。美しく幻想的な絵画にて、原三溪翁愛蔵の名作、また翁の別荘で若かりし頃の院展派の大家たちの感銘深く鑑賞されたところと存じます。